

『ウォルト・ディズニーの夢』

岡本ジュンイチ・脚本

登場人物

ウォルト・デイズニー

ロイ・デイズニー

ハル・ホーン

0

舞台はデイズニー・スタジオの社長室。ロイ・デイズニー、自分の書類のページをめくり、何やら苦し気な表情を浮かべている。

ロイ「……はあ？」

そこに、ウォルト・デイズニーが登場。ウォルト、何やらいいらとした表情で、興奮気味の様子。

ウォルト「ごめん、ロイ兄さん。ずいぶん待たせちゃったね」

ロイ「いや、いいよ。……それより、どうかしたのか？」

ウォルト「いやあ、大したことないよ。ただ、ちょっと腹立たしいことがあつただけさ」

ロイ「腹立たしいこと？」

ウォルト「そう。あれは、汽車の中での出来事だつた。僕がここに来るまでに汽車で通勤してたところに、男が一人やってきたんだ。それで、その男と世間話をしていたんだよ」

ロイ「うん。それで？」

ウォルト「そういう話をしていくうちに、あいつ僕の職業について尋ねだしたんだ。尋ねられたものは受け答えするのが礼儀でしよう？だから僕は、自分の職業を素直に話したんだ。『僕はアニメーション映画の仕事をしてるんだ』ってね。奴はどんな反応したと思う？」

ロイ「さあ、想像つかないな。どんな反応だった？」

ウォルト『ふうくん』の一言だけ。映画の仕事をやってる人間に向かって『ふうくん』だよ？」

ロイ「ああ……」

ウォルト「それってひどくない？」

ロイ「ああ。まあ、それは不運なできごとだったな」

ウォルト「まったくだよ！ ああ、ムカつく！」

ロイ「まあ、お前の気持ちも分からぬでもないけど、仕方ないだろ。俺たちはハリ

ウッド映画のスターじゃない。あくまで短編のアニメーションなんだからな」

ウォルト「でも……」

ロイ「それより、そろそろ本題に入らないか、ウォルト」

ウォルト「ごめん、兄さん。じゃあ、そうしよう」

ロイ「ああ。見ろよ。これが去年の興行収入だ」

ウォルト「うわあ……」

ロイ「ガタ落ちだ」

ウォルト「そうか……あのミッキーシリーズでも、この成績なのか」

ロイ「ああ」

ウォルト「おかしいなあ。最近じや、新キャラのドナルド・ダックも出てきたばかり

なのに……」

ロイ「今はこのご時世だ。クオリティーなんて関係ないんだよ」

ウォルト「そういうものなのかな」

ロイ「そういうものさ。なにしろ、相手は世界恐慌だぞ」

ウォルト「そうかあ……でもなあ、何で同じ映画でも、こんなに差があるんだろ

うね」

ロイ「差って、何が」

ウォルト「実写とアニメーションのことだよ」

ロイ「ああ」

ウォルト「世界恐慌があつても、みんなこぞつて実写映画を観に行くじゃないか。な

のに、なんでアニメーションは、こんなにも客足が重いんだ」

ロイ「そりや、実写のほうが長く観られるからだろ。あつちはチケットの値段の割に、長編の実写映画を、2本セットで見ることができるんだぞ？」 そりや、短編作品が

主流のアニメーションじや太刀打ちできないさ」

ウォルト「それは、たしかにそうだけど……」

ロイ「それより、コレを見ろよ。見てのとおり、ウチの収支は大赤字だ」

ウォルト「そんな……」

ロイ「ウォルト、お前が映画業界に残した功績は大きい。当時は映像と生演奏の組み合わせでしかなかつた无声映画に、世界で初めて声を入れたのはお前だ。モノクロ

映画が常識だった時代に、はじめて色が加わった映画を手がけたのもお前だ。こうして、大衆は聞き心地がよく、彩り豊かな映画を楽しむ礎が築きあがつた。そういう名高い功績は、わが弟ながら純粋にすごいなとは思う。これまで大衆に、希望の光を当ててきたと言つてもいいだろ。だがな、そのおかげでいま俺たちはどうなつてゐる。バカ高い音響機材や画材の経費のおかげで、俺たちは借金を抱えているんだぞ」

ウォルト「それは申し訳なく思つてるよ」

ロイ「謝つてほしいワケじゃないんだ。ただ俺は、お前に現実を直視してほしかつただけ。わかるだろ？」

ウォルト「……」

ロイ「ウォルト、これまで俺たちの会社は、昨今的好景気と一緒にどんどん大きくなつてきた。おかげでこんなにも立派なオフィスやスタジオができたし、多くの若い才能も発掘してきた。だが、もう潮時だ。市場の規模から考えて、はつきりと言わせてもらおう。もう、アニメーション映画に未来はない。もつと端的に言おう、ウォルト。リストラだ。事業の黒字化のために、余分なクリエイターの首を切るんだ」

ウォルト「兄さん」

ロイ「いまの俺たちでは、もう限界なんだ。社員の解雇をしろ。人件費を削減して、黒字化を目指すんだ」

ウォルト「いや、それはできないね」

ロイ「どうして」

ウォルト「僕には夢があるからさ」

ロイ「夢だつて？」

ウォルト「そう。あのアニメーターたちと一緒に、世界随一の名作をつくり上げるんだ！」

ロイ「ウォルト……」

ウォルト「彼らとともに、この世にまだ存在しない長編アニメーションを手がける。そしてその名作を、専門家や大衆にも見てもらうんだ。いや、それだけじゃない。あのハリウッド映画の名優・喜劇王チャップリンにも見てもらうんだ。それこそが、僕の夢だ！」

暗転。
オープニングの音楽。

1

舞台は前場に同じ。
舞台上にはロイとウォルトがいる。

ロイ「バカか、お前は」

ウォルト「なんだつて？」

ロイ「お前、ついに頭がおかしくなったか」

ウォルト「ひどいよ！」

ロイ「だつて」

ウォルト「ボクは本気だよ、ロイ兄さん」

ロイ「だとしたら、お前の考えは幼稚すぎる。甘いよ。甘すぎるよ」

ウォルト「やつてみなくちやわからないじやないか」

ロイ「いいや、その先はもう目に見える。ゼッタイ失敗する」

ウォルト「兄さん」

ロイ「長編のアニメーションなんて需要がないんだよ。ただでさえ短編アニメーションは少しずつ客足が遠のきだしているのに、そのアニメーション映画の尺を伸ばしてどうするんだ。バカじやないか、お前は」

ウォルト「あはははは」

ロイ「何がおかしいんだ、ウォルト。ひとが真剣に話している時に」

ウォルト「兄さんはなにもわかっちゃいないね」

ロイ「なに？」

ウォルト「兄さんは、やっぱりいい意味でも悪い意味でも、ただの計算高い銀行マンでしかない。兄さんは、僕の見えている世界が見えてないんだ」

ロイ「なんだと！ ウォルト、今まで誰のおかげで、ここまで来れたと思ってるんだ」

ウォルト「いや、そんなことは言うまでもないよ。ロイ兄さんのおかげで金銭的には

すごく支えられてきた。それには感謝してる。けど兄さん、あなたは僕と決定的に違うところがある

ロイ「決定的に違う？」何が

ウォルト「それは、観察力だ」

ロイ「観察力？」

ウォルト「そう。僕は長年、誰よりもアニメーション映画をたくさん観てきて、誰よ

りも一観客として作品と客席を観察してきた。だからこそわかるんだ。これからの

アニメーションは、長編の時代になるってね」

ロイ「おいおい、ずいぶん話がそれちやつたものだな。俺たちはいま金の話をしているんだよ。未来のアニメーションの話をしてるんじゃないぞ」

ウォルト「ならロイ兄さん。あなたにもわかりやすく、端的に話してあげるよ」

ロイ「何を偉そうに」

ウォルト「ロイ兄さん。これからは、長編アニメーションが儲かる時代になる。それは間違いない事実だ」

ロイ「ほう。そんなに儲かるのか、長編アニメーションが」

ウォルト「ああ、間違いないよ」

ロイ「なら、ぜひその根拠を知りたいな。観客がそう1～2時間もギャグマンガの映

画で笑い転げ続けるとは思えないが？」

ウォルト「誰がコメディー映画をつくるって言つた？」

ロイ「……どういうことだ」

ウォルト「実はね、兄さん。僕の中では、もう企画が固まってるんだ。そして、その企画を書類にまとめてみたんだ。こんなふうにね」

ウォルト、机の引き出しから企画書を取り出す。

ウォルト「僕がこれからつくる映画は、世界中の大衆が涙なしでは見られない、感動の超大作だ。いや、正確には僕じやない、『僕ら』だ。今までのアニメーションは、人間の誇張を描いたコミカルな演出だったけど、この作品は違う。レオナルド・ダ・ヴィンチのような、徹底したリアリズムを追求する。そして肝心の脚本は、世界でもとても名高い、とてもなく秀逸な文学作品を原作にするんだ」

ロイ「ホウ、なるほど。で、その原作とは何だ？ シエイクスピアか？ もしかしてチエーホフか？」

ウォルト「いいや、違うね」

ロイ「じゃあ何」

ウォルト「童話『白雪姫と7人の小人』さ！」

ロイ「……はある？」

ウォルト「兄さん、知らないの？ 『白雪姫と7人の小人』

ロイ「いやいや、知つてることあるけど。で、その童話がどうしたつて？」

ウォルト「だから、『白雪姫と7人の小人』で、全米を感動させるんだよ」

ロイ「……（大声で笑いだす）

ウォルト「なんで笑うんだよ、兄さん！」

ロイ「すまん、ウォルト。もう、涙が止まらなくて」

ウォルト「バカにしてる？」

ロイ「いや、バカにはしてないさ」

ウォルト「なるほど、要するに兄さんは、涙が出るほど笑えちゃったわけだ……」

ロイ「そう落ち込まなくてもいいだろ、ウォルト」

ウォルト「だつて」

ロイ「そりやお前、世界で名高い、とてつもなく秀逸な文学作品と言われて、まさか

童話が出てくるとは思わないだろう」

ウォルト「だつて」

ロイ「もちろん、俺はお前をバカにしてるわけじゃない。だがなウォルト、兄として忠告させてくれ。そんな脚本では、大衆はおろか、チャップリンにも見向きされないぞ」

ウォルト「だつて？」

ロイ「白雪花姫と7人の小人なんて、みんなが知ってるおとぎ話じやないか。本がなく

ても、みんな暗記できちゃってるだろ」

ウォルト「兄さん」

ロイ「なんだよ。俺が何か、間違ったことを言つたか？」

ウォルト「…………いや、間違つてはないよ。たしかに、白雪姫と7人の小人はベタな童話だよ。でもだからといって、その童話が稚拙であるわけではないでしょ？」

ロイ「あのな、ウォルト。俺が言いたいのは、要するに、誰でも知つてるおとぎ話ごときではヒットしないってことだよ」

ウォルト「そうかい？」

ロイ「ああ」

ウォルト「なんでそういう言い切れるのさ」

ロイ「いや、それは、先が読めちやうから」

ウォルト「先が読めちやうのが、そんなにいけないの？」

ロイ「何が言いたいんだ」

ウォルト「あのね、ロイ兄さん。この企画は、なにも一朝一夕で生まれた思い付きなんかじゃないんだ。僕がずっと前から温め続けていた、世紀の大傑作の企画なんだ」

ウォルト、ロイに企画書を手渡す。

ウォルト「読んでもほしい、ロイ兄さん。きっと感動するはずだ」

ロイ「ほんとか？」

ウォルト「ああ。一度だけでいいんだ。この企画書を読んでちつとも感動しなかつたら、僕は、『白雪姫と7人の小人』を諦めてもいい。それだけ自信があるんだ。読

んでくれ、ロイ兄さん」

ロイ「……（企画を読み上げる）本企画は、この世に未だ存在しない映画ジャンル・長編アニメーション映画における、最初にして最高の名作をつくり上げる企画である。脚本の原作は、グリム童話の『白雪姫と7人の小人』。本作を、ヒロイン・白雪姫のために、7人の小人たちが悪の女王と戦うという、現代的な視点で描いて脚色を施す。作風はリアリズムを徹底し、隅から隅まで文句のつけようのないリアリティーを追求していく。あらすじは、以下のとおり。……」

ウォルト「ロイ兄さん？」

ロイ「いや、すまん。つい……」

ウォルト「ロイ兄さんの意見が聞きたい。どうだつた?」

しばしの沈黙。

ロイ「……ウォルト、最高だよ。最高じゃないか!　こんな映画がつくれるのなら、俺も観客として観てみたいよ」

ウォルト「ありがとう、ロイ兄さん」

ロイ「こんな企画が生み出せるなんて。ウォルト、お前は本当に、天才だ」
ウォルト「いや、僕は天才なんかじゃないよ。僕はただ、アニメーションの世界にとりつかれた、絵もまともにうまく描けない、いち漫画作家さ。それに、この企画はまだ完成なんかじゃない。何百ものアニメーターたちが力を結集させて、初めて成り立つんだ」

ロイ「ウォルト……」

ウォルト「ロイ兄さん。彼らアニメーターを動かすには、莫大な資金が必要なんだ。頼むよ!　またしばらく、資金繰りには苦労かけるとは思う。けど、必ず取り戻せるときはやつてくるから。お願ひだ、兄さん。力を貸してほしい」

ロイ「……わかった。またいろいろと伝手をたどつて、ウチに融資をしてくれる銀

行や会社を探してくるよ」

ウォルト「ありがとう、ロイ兄さん!」

ロイ「いやいや。まだ喜ぶところじゃない。ウォルト。俺たちの手がけるアニメーショングで、あのチャールズ・チャップリンを泣かせてやるうぜ」

ウォルト「ああ!　そのつもりさ!」

暗転。
音楽。

幕間

舞台はスタジオの制作室。

ウォルトはアニメーターたちに声をかける。

ウォルト「みんな、仕事の途中すまない。ちょっと集まってくれ。今度つくる映画の企画が固まつたんだ。タイトルは、『白雪姫と7人の小人』。原作はみんな知つて野通りの、あの童話だ。待つてくれ、最後まで話を聞いてほしい。キミたちが怒るのももつともだ。童話なんかで大衆の心を動かせるはずがないってことぐらい、こつちだつて百も承知さ。でも、僕は確信しているんだ。どんな人間にも、子供だった頃は必ずあるつてね。……彼らにまた、あの小さい頃に抱いていた明るい未来を思い出させたいんだ。この世界恐慌にも負けない、夢と希望にあふれた長編アニメーションを、僕は手がけたい。そのためには、みんなの力が必要なんだ。お願いだ。僕に力を貸してほしい。お願いだ!　……えつ、どんな話なかつて?　ありがとう!　よくぞ聞いてくれた!　それじゃあ、僕の構想している『白雪姫と7人の小人』を、今ここで見せてあげるよ!　説明するのに時間がかかるのは勘弁してくれ

れよ。大丈夫、必ず感動するから！ 昔々あるところに、『白雪姫』というとでも可愛い娘がいたのさ。その白雪姫は……」

ウォルト、演技を交えて白雪姫のあらすじを語り出す。
暗転。

2

舞台は前場に同じ。
ロイ、ウォルト登場。

ウォルト「さーつて、今日も仕事するぞ！」

ロイ「そうだな。調子の方はどうだ？」

ウォルト「僕の気分のこと？ それとも作品のこと？」

ロイ「両方だよ、ウォルト」

ウォルト「作品の方は全然。ダメダメだよ。シーンは見てのとおり、何度も書き直させてるよ」

ロイ「そうか……体調のほうは」

ウォルト「そっちの方もあんまり。なんかイライラするんだよね」

ロイ「まあ、作品の出来が悪けりや、そうなるか」

ウォルト「はあ。みんな、あんなに僕の企画を熱心に聴いてたのに。耳クソでもたまつたのかなあ」

ロイ「ウォルト、口が悪いぞ」

ウォルト「だつて」

ロイ「まあ落ち着けよ。お前の焦る気持ちはよくわかる。でも、最初はそういうものさ。どんな天才でも、いきなり理想の作品ができるわけがない」

ウォルト「そういうものかな」

ロイ「ああ、うさ。今までそういうやつて書き直させて、どんどんクオリティーを上げてきただろ。今はその時期なんだよ」

ウォルト「でも、この調子じやいつに映画が完成するんだか」

ロイ「大丈夫、まだ金はたんまりある。50万ドルもあるんだぞ？ 時間をかけて、

いいものをつくろうや、ウォルト」

ウォルト「…………うん、そうだね。それにしても、よくこんなにたくさんのお金を調達できたね」

ロイ「だてに銀行マンをやつてないんだよ。あちこち歩き回って、さまざまな銀行や会社に融資してもらえるように、こっちだつてそれなりの配慮をしているんだよ。たとえばな、まずは豪華な食事を用意するんだよ。それで気分を良くさせておいて、世間話から入っていく。いいか、ウォルト。金つてのは信用なんだ。信用の高い人間になつて、初めて大金を手にする権利が与えられるんだ。逆に言えば、会つた当初から挨拶もまともにできない奴には、金は一生回つて来ないものなんだよ。ビジネスの世界は残酷だ。よく覚えておいてくれよ。この50万ドルを調達するのに、どれだけ苦労したか」

ウォルト「ヒュウ！」

ロイ「ウォルト……お前相変わらず、金には無頓着な男だな。人が資金調達の極意を教えてやつて、いるのに、何て態度をとつてるんだ」

ウォルト「だつて、それは僕の仕事じやないでしょ」

ロイ「お前の仕事じやない!? 馬鹿を言え。社長であるお前が、金のこと無関心でいてどうするんだ。しつかりしろよ、ウォルト。俺たちの命がかかつてんんだぞ」

ウォルト「ごめーんネ」

ロイ「おい」

ウォルト「ごめんごめん、つい口が勝手に」

ロイ「……まあ、仕事に戻るとするか。ここはビジネススクールじやない、現場なんだからな。いつまでも金に無関心な社長に金銭論を語つても無駄だ。お前の場合は、論より実践だ」

ウォルト「悪いね」

ロイ「いいよ。さ、仕事をやるぞ」

ウォルト「うん」

間。
ウォルト、ひどく咳払いする。

ロイ「大丈夫か、ウォルト」

ウォルト「ああ、これは心配ないさ。いつものことだよ」

ロイ「そう、ならいいんだけど」

間。
ウォルト、机に向かい、自分の作業を行う。

ウォルト、再び咳払いをする。

ロイ「本当に大丈夫か、ウォルト」

ウォルト「なに、気にすることはないよ」

ロイ「本当か?」

ウォルト「ああ、大丈夫だつて」

間。
ウォルト、ひどくせき込む。

ロイ「大丈夫じやなさそつだな」

ウォルト「いちいち気にしなくていいよ、ロイ兄さん」

ロイ「だつて」

ウォルト「僕の咳払いは、もはやスタジオではおなじみの光景になつてるんだ。それでね、ロイ兄さん。僕の咳を聴くと、怠けてたアニメーターたちは急いで席に戻つて、付け焼刃に制作をしているんだよ。僕はつい怒っちゃつたよ。『あのは、キミたち。人間疲れはつきものだ。休みたい時は休みなさい。僕が来たからつて、皆して急に机に向かうな』ってね」

ロイ「なるほど」

ウォルト「もう、笑えちやうでしよう？」

ロイ「そうだな。みんなの焦る顔が、フツと浮かんでくるよ」

ウォルト「そうでしよう？ あははは」

間。
ウォルト、どうも落ち着かない様子。

ロイ「ウォルト、しつこいようだがもう一遍言わせてくれ」

ウォルト「なんだい、ロイ兄さん」

ロイ「大丈夫か？」

ウォルト「いや……ホントは『大丈夫』と言いたいところなんだけど。これ以上隠

しても無駄みたいだね」

ロイ「どうかしたのか」

ウォルト「実は、最近集中力がガタ落ちしちゃつてさ」

ロイ「まあ、そうだろうな。それはハタから見ててもわかる」

ウォルト「そうなの？」

ロイ「ああ。お前のよくやる行動パターンはおもに2つあるもんな。何だかわかるか？」

ウォルト「いや、全くわからない。というか、想像もできない」

ロイ「一つは、作品を見入るようにして静かに鑑賞しているパターン。もう一つは、

指をカタカタ鳴らすパターン」

ウォルト「あ」

ロイ「お前は、いい作品を見る時と悪い作品を見る時とで、ホント極端に違うもんな」

ウォルト「いやあ、それほどでも」

ロイ「ほめてない」

ウォルト「知ってるよ。最後まで話を聞いてくれ」

ロイ「続きをかるのか。どうした」

ウォルト「いやあ。あのさ兄さん。最近、ものすごい不安なんだ」

ロイ「何が？」

ウォルト「知ってるよ。最後まで話を聞いてくれ」

ロイ「続きをかるのか。どうした」

ウォルト「自分の身体がだよ。最近僕、医者に注射を打つてもらつたのは知つてるでしょ？」

ロイ「ああ、例の精神安定剤のことだろ？」

ウォルト「そう。でも、その注射を撃つても一向に良くならないんだ。むしろ逆効果なんだよ」

ロイ「そんなことないだろ」

ウォルト「本当さ」

ロイ「でも、専門医の指示で注射を打つてもらつてるんだろ？」

ウォルト「まあ、そうだけど」

ロイ「だつたらいいじやないか。良くなつてるんだよ。お前自身が『逆効果だ』と思
い込んでいるだけ。人間、疲れる時なんていくらでもあるさ。大切なのは、お前自
身の向き合い方だ。本当に疲れているんだつたら、すぐその場で休憩すればいい。
それで難しいなら、人に頼ればいい。それでも無理なら、薬に頼ればいい。今のお
前の段階は、薬に頼るべき段階だ。こういう時は、現代医療の力を借りてればいい
んだよ。な？」

ウォルト「僕、だつて、できるものならそうちたいさ……でも！」

ロイ「悪い、ウォルト。そろそろ仕事に戻らせてほしい。俺もそうち暇じやないんだ。ちよつと、会計事務をやらせてほしい。詳しいことは、あとで話を聞かせてくれ。いいか？」

ウォルト「うん……ごめん、ロイ兄さん」

間。

ロイ、自分の作業に戻る。

ウォルト「あの、兄さん。話しかけてもいい？」

ロイ「話しかける分にはいいぞ。なんだ？」

ウォルト「つかぬことを伺うけど。いまウチの会社つて、どうなつてる？」

ロイ「見てのとおり、赤字の中の大赤字だよ。マツカツカ」

ウォルト「マジか……」

ロイ「当たり前だろ。ただ短編映画の制作を淡々とこなしていればよかつたのに、一つ一つのクオリティーをどんどん要求するわ、社内の美術学校も拡大するわ。そして極めつけは、例の長編アニメーション映画の製作費だ。おかげでウチの家計は、もうとっくに火の車だよ」

ウォルト「申し訳ない、ロイ兄さん。申し訳なさ過ぎて、言葉も出ないよ。もう、何とお詫びすればいいのか……」

ロイ「今さら何言つてるんだよ」

ウォルト「だつて、本当に申し訳ないから」

ロイ「それは聞いた」

ウォルト「ロイ兄さんには、いつも感謝してるよ。このディーズニースタジオが何とか経営できているのは、みんな兄さんのおかげだ」

ロイ「今頃気づいたか」

ウォルト「えつ？」

ロイ「いや、ちよつと言つてみただけ。ジョークだよ、ジョーク」

ウォルト「あははは、これはとんだブラックジョークだ」

ロイ・ウォルト「あははははは」

ロイ「……そろそろ、仕事に戻ろうか」

間。

ウォルト「はあ、もうダメだ」

ロイ「なに言つてるんだよ。もう疲れたのか？」

ウォルト「いや、疲れてない」

ロイ「本当か？」

ウォルト「ああ、疲れてない」

ロイ「でも、さつきは『集中力が切れて困る』つて」

ウォルト「そういう意味じやなくて」

ロイ「じゃあ、どういう意味なんだよ」

ウォルト「長編アニメーションの出来のことだよ」

ロイ「ああ」

ウォルト「みんな、頑張つてるのはよく分かるんだ。けど、まだまだ全体のレベルが低い。作品のクオリティーが良くないんだ」

ロイ「ウォルト。それは、お前の理想が高すぎるだけなんじゃないか？」

ウォルト「そんなことないよ」

ロイ「さて、それはどうかな」

ウォルト「なんだって？」

ロイ「たかが漫画映画ごときにこだわりすぎなんだよ」

ウォルト「何言つてるんだよ、ロイ兄さん。ウチは、その漫画映画のプロダクションでしよう？」

ロイ「いくらプロでも、妥協はしてもいいだろって言つてるんだよ」

ウォルト「いいや、できないね。神は細部にこそ宿るんだ。ほんの少しでも手を抜いてしまったら、それこそ僕たちの、今までの努力が台無しになつてしまふ。僕たちが目指すべきなのは、徹底的なリアルの追求だ。そこらの手抜き映画とは違うんだ」

ロイ「気持ちはわかる。だがな、ウォルト。誰もお前の身体を壊してまで、作品をつくつてほしいとは思つてないはずだ」

ウォルト「それはそうだよ。そなんだけど……」

ロイ「心配するな。俺たちにはまだ、時間と金がある。ゆっくりとやろうじゃないか、

ウォルト」

ウォルト「でもロイ兄さん、ウチの家計はマツカツ力なんでしょう？」

ロイ「相変わらずファインシャル・リテラシーの低い発言をするな。いいか？ 資金があるのと事業が赤字なのは別問題だ。つまりはキヤッショーフローの問題であつて、ストックの問題じやないんだ」

ウォルト「ごめん、兄さん。なに言つてるのかわからない」

ロイ「だから、つまりはキヤッショーフロー、『金の流れ』をつくれさえすればこっちのものだつていう話だよ。」

ウォルト「ますますわからなくなってきた……」

ロイ「つまり、俺たちは大きな借金をして、その借金で金をもらう商品を作つてるんだよ。その借金こそが今回の50万ドルで、ここから作るキヤッショーフロー、つまり『金の流れ』つてのは、これから完成させる映画の版権や入場料、そして著作権料のことさ。それぐらいは理解できるだろ？ つまり、俺たちが目指すべきなのは、新作のアニメーションで生まれる『売れる仕組みづくり』なんだよ」

ウォルト「……」

ロイ「おい、ウォルト。聞いてるのか？」

ウォルト「いや……ごめん」

ロイ「つたく。何だよ。しつかりしろよ、社長。このままじゃ本当に倒産しちまうぞ」

ウォルト「わかってるよ！」

ロイ「……」

ウォルト「ごめん、兄さん。やっぱり、今はそういう、お金の話はやめよう」

ロイ「ウォルト」

ウォルト「夢を見させてほしい」

ロイ「は？」

ウォルト「しばらく、夢を見させてほしい。お金はすべて、兄さんに任せるから」

ロイ「ウォルト……」

間。
ウォルト、自分の仕事に戻る。

ウォルト「ダメだ。全然ダメだ！」

ロイ「ウォルト」

ウォルト「こんな感じや、いつまで経つても低俗なカルチャーリーとして蔑まされるだけだ。もつとこだわり抜かなくちゃ。感動させなくちゃ！」

ロイ「……」

間。
ロイ「そうだ、ウォルト。一つ、提案がある」

ウォルト「なんだい、兄さん」

ロイ「たまには大きな休暇でもとつて、家族みんなでヨーロッパにでも行かないか？」

ウォルト「え？」

ロイ「ほら。俺たちは一人とも、妻と結婚してから10年も経つじゃないか。そのお

祝いだよ」

ウォルト「お祝い？ こんな時にかい？」

ロイ「ああ。疲れが出たときには、思い切った気分転換も重要だ。どうだ、ウォルト。

海外へ取材もかねて、旅行へ出かけてみないか？」

ウォルト「……」

ロイ「どうした、ウォルト」

ウォルト「いや。ただ僕は、ここに残ってる社員たちに、申し訳なく思つて」

ロイ「社員たちに？」

ウォルト「うん。だつてみんな、あんなに一生懸命がんばってくれているんだ。それなのに、社長の僕が海外へぜいたくをしに行つたら、みんな不満がたまっちゃうと思うんだ。なにより、みんなに申し訳ないよ」

ロイ「なに、それは大丈夫だ、ウォルト。話せば、みんなわかってくれるさ」

ウォルト「ほんとに？」

ロイ「ああ。目の前の仕事や金のことに執着してカツカされるより、むしろ休暇で気

分を和らげてもらった方が、彼らにとつてもハッピーになるとと思うんだよ」

ウォルト「ハッピーに？」

ロイ「そう。どうだ、ウォルト。海外旅行、本気で考えてみないか？」

ウォルト「……そうだね。思えば、僕の妻もよくやつてくれるもんね。彼女にはいつも負担ばかりかけてる。たまには、ご褒美をしてやらないとね。行こう、ロイ

兄さん。どうせ行くなら、思いつきり旅行しちゃおう！」

ロイ「ああ、そうしよう！」

ウォルト「あははっ！ ヨーロッパかあ、楽しみだなあ」

ロイ「（傍白）やつぱり、ウォルトはこうでなくつちやな」

ウォルト「え？ 何か言つた、兄さん」

ロイ「いいや、なにも。ちょっと、トイレに行つてくる」

ウォルト「あ、ああ……」

ロイ、退場。

しばらくして、深くため息をつくウォルト。

ウォルト「僕も行こうつと！」

ウォルト、退場。
暗転。

3

舞台は前場に同じ。

誰もいない社長室の中に、ウォルトが登場。

電話の音。

ウォルト、電話に出る。

ウォルト「ああ、もしもし。僕だよ、ウォルト。どうした。え？ カカリつけの医者から、僕の甲状腺の注射を忘れないように、だつて？ あははは。それについては心配ないよ。もう治つたと言つといてくれ。それと、先生にはこうも伝えておいてほしい。例の注射は、これからは先生が打てばいいってね」

受話器を置くウォルト。
ロイ、登場。

ロイ「ずいぶんご機嫌じやないか、ウォルト」

ウォルト「ああ、ロイ兄さん」

ロイ「海外旅行で浮かれちまつたか？」

ウォルト「まさか。これから名作を手がけるところなんだよ？」

浮かれてる場合じや

ないでしょ？」

ロイ「そう言うと思った」

笑い声をあげるウォルト。

ウォルト「はあくつ。それにしても、緊張するなあ」

ロイ「そうだよな。まさかあのヨーロッパでも、ディズニースタジオの次回作を心待ちにしてくれてるなんてな」

ウォルト「そうだよ、それなんだよ」

ロイ「ずいぶん出世したものだな。ウォルト社長」

ウォルト「いやいや。ここまで来れたのは、みんなロイ兄さんのおかげだ」

ロイ「何を言つてゐるんだ」
ウォルト「いや、ホントさ。今まで質のいい作品をつくり続けられたのは、本当に兄さんのおかげだ。ロイ兄さんが汗水流して集めた、あの莫大な資金のおかげなんだ。時として詐欺師と出くわしたこともあつた。けど、それも乗り越えて、僕が国内外の人気者になれた。それというのも、兄さんがいてこそだ。ロイ兄さん、本当にありがとう！」

ロイ「おいおい、よしてくれよ」

ウォルト「いいや。今日は思う存分言わせてほしい。気分がいいんだ」

ロイ「あはは。やっぱお前は、浮かれてるよ」

ウォルト、ロイを抱擁する。

ロイ「これから名作を手がけるんだろう？」

ウォルト「ごめん」

ロイ「いや、いいんだ。人間誰でも、喜びたい時はあるさ。そういう時は素直に喜べばいい。喜びのない人生なんてない。もしあるのなら、それは拷問に等しい。そうだろ？」

ウォルト「ああ、それもそうだね。そのことについては、身に染みて思うよ」

ロイ「ついてはウォルト、次はどんな名作を手がけるんだ？」

ウォルト「前にも言つたでしょ？　『白雪姫と7人の小人』だよ」

ロイ「いや、それはわかってる」

ウォルト「どういうこと？」

ロイ「俺が言つてるのは、次はどんな売れる短編アニメーションを手がけるんだってこと」

ウォルト「ああ、短編のこと？」

ロイ「当たり前だろ。今はまだ存在しないからな、『長編アニメーション』といふ

映画ジャンルは」

ウォルト「それもそうだ」

ロイ「長編アニメーションはあくまで奥の手だ。それまでの間は海外向けの短編で食いつなぐんだ」

ウォルト「なるほど」

ロイ「で、次回作の構想は」

ウォルト「ちょっと待つててよ」

ウォルト、カバンの中からノートを取り出し、ページをめくり出す。

ウォルト「外国市場でもつと成功させるには、セリフのない映画をもつと作ったほうがいいように思うんだよね。海外では无声映画がまだ主流みたいだから」

ロイ「そうだな。向こうはまだそんな様子だったもんな。まあ、やっぱしばらくは、

海外に依存する形になるワケだな」

ウォルト「まあ、そういうことになるね」

ロイ「なるほど」

ウォルト「かといって、筋書きやアイデアがいいのに、会話が入つてゐるからダメだ、

というようなことはしたくないなあ……」

ロイ「おいおい、そういうのは文芸部のテツドに言つてくれ。俺の領分ではないだろ」

ウォルト「ごめん、兄さん」

ロイ「いいよ。お前はアニメーションとなるとホントアツくなるんだから」

ウォルト「ごめん」

ロイ「バカ、ほめてんだよ」

ウォルト「え？」

ロイ「ほめてるんだよ。ほめ言葉」

ウォルト「はい？」

ロイ「この野郎」

ウォルト「ごめん」

ロイ「まあ、別にいいけど」

ウォルト「だつて兄さん。こんなに暗いトーンで急に褒められても、反応に困っちゃうよ」

ロイ「まあ、それもそうか」

間。

ウォルト「……何か、あつたの？」

ロイ「は？」

ウォルト「本当は、何かあつたんじゃないの？」

ロイ「どうして」

ウォルト「いや、なんとなくだけど」

ロイ「いや……お前が心配することじやないさ」

ウォルト「何かあつたんだね？」

ロイ「違う」

ウォルト「何かあつたんでしょ？ 教えてよ」

ロイ「ダメだ」

ウォルト「兄さん」

ロイ「いまは教えられない」

ウォルト「なぜ」

ロイ「またお前の創作に支障をきたすからさ。まあ、余計なことは心配するな。俺が何とかするから」

ウォルト「兄さん」

ロイ「ちよつと、気分転換に散歩に行つてくるよ」

ロイ、手提げカバンを持つて退場。

ウォルト「(傍白)へたっぴ。こんな忙しい時に、カバンを抱えながら散歩だつて？ 一
体、どんな散歩だよ」

ウォルト、深くため息をついた後、電話をかける。

ウォルト「もしもし、テッドかい？ 今度の作品の構想で話し合いたいことがあるんだけど。いいかい？ ……わかった。じゃあ今から、そっちへ向かうよ。楽しみにしててくれよ。今回の短編企画も面白いのを用意してるから。じゃあ」

受話器を置くウォルト。

ウォルト「僕は僕で、やるべきことをやらなくちゃな。うん。がんばろう！」

ウォルト、荷物をまとめ始める。

すると、ロイの机から雑誌が見つかる。

ウォルト「ん？ ロイ兄さん、雑誌を買ってたのか。ふうん……見ていいのかな？ まあ、いいよね？ いや、ダメか。……見ちやえい！」

ウォルト、雑誌に手を伸ばしページをめくる。

そこで笑つたりフムフムうなずいたりするウォルト。
しかし、ウォルトはあるページを見て、表情を一変する。

ウォルト「……何これ。『ウォルト・ディズニースタジオ、150万ドルの大借金』……『借金王・ディズニーの道楽』。『資金繰りめちゃくちゃな経営者 ウォルト・ディズニー、ついに破綻か』！？ ……なんだこれは！」

暗転。

4

舞台は応接室。
ウォルト、ハル・ホーン登場。

ウォルト「いやあ、お忙しい中すみません、ハル・ホーン」

ホーン「いやいや、大丈夫ですよウォルト。あなたからお願いされたら、断ろうにも

断り切れない

ウォルト「そんな」

ホーン「いやあ、いやいや。何しろ私は宣伝部長ですからね。ユナイテッド・ア

ーティスツ社の」

ウォルト「恐縮です」

ホーン「いやいや。恐縮なんてしないでくださいよ。何年付き合ってきたと思つてる
んですか」

ウォルト「そもそもそうですね」

ホーン「ところでウォルト。例の契約の件は、考え直されましたか」

ウォルト「ああ、ウチの長編映画の、テレビ放映についてですか」

ホーン「ええ」

ウォルト「今日はその話ではないんですね」

ホーン「ああ、そうなんですか？」

ウォルト「はい。どうぞ、おかげになつてください」

ホーン「ええ。失礼します」

ホーン、ソファーに座る。

ホーン「あなた、最近痩せましたか？」

ウォルト「え？」

ホーン「ダイエットでもしたのですか？」

ウォルト「(笑いながら)まさか。僕が、そんなことをする余裕があると？」

ホーン「違うんですか？」

ウォルト「違いますよ。ダイエットなんてしてゐる余裕はありません。それをしてたら、

長編アニメーションの監修をしてますよ」

ホーン「例の『白雪姫』企画ですか？」

ウォルト「ええ、まあ」

ホーン「もしかして、今日私をここに呼んだのは、その案件のことですか？」

ウォルト「ご名答です。ただ正確には、案件というよりは『相談』です」

ホーン「相談？」

ウォルト「はい。ハル・ホーン。わが社が新しい試みをしているのは、あなたもご存

知ですよね」

ホーン「ええ、知つてますとも。あなたの製作過程は新聞沙汰にも雑誌の記事にもな

りますからね」

ウォルト「筒抜けですか」

ホーン「ウチも社会に娯楽を提供してゐる人間です。新聞や雑誌に目を通すのは当然の

ことですよ」

ウォルト「ですね……」

ホーン「で、ウォルトじきじきの相談とは、何なのですか」

ウォルト「いえ、その……よその雑誌が、ウチの会社の誹謗中傷を書いていたんで

す」

ホーン「誹謗中傷？」

ウォルト「はい。これを見てください」

ウォルト、カバンから雑誌を取り出してホーンに渡す。
雑誌のページをめくり出すホーン。

ホーン「ううむ。なるほどねえ」

ウォルト「誹謗中傷はこれだけじゃありません。あれ以来毎週、ウチの会社の悪口ばかり書かれてあるんですよ。しかも、この雑誌のレベルだけじゃない。そこかしこのマスメディア中に！」

ホーン「ほう」

ウォルト「当初見積もつていた50万ドルの予算が底をついて、わが社の借金は日に日に増えていくばかり。それは事実です。一部の記者に、その事実が漏れちゃつた

んですよ。そこからさらに、そのゴシップネタに尾ひれ端ひれがついて。ひどいんですよ。おかげでウチの前評判はガタ落ちです」

ホーン「なるほど」

ウォルト「ハル・ホーン、どうすればよいでしょうか」

ホーン「どうする、と言いますと?」

ウォルト「これからウチの方針についてですよ」

ホーン「話が見えて来ませんな」

ウォルト「マスメディアの誹謗中傷のおかげで、多くの専門家や評論家が、ウチの悪口を展開しているんですよ。作品をまだ見てもないのに、あたかもわかつた気になつて。中にはアニメーターたちの悪口まで書いてる人までいるんですよ。ここまでひどいことを書かれたら、客足が遠のくのは必然です」

ホーン「なぜですか」

ウォルト「え?」

ホーン「なぜそんなに心配になるのですか」

ウォルト「いや、だつて今は、借錢してるんですよ、ウチは」

ホーン「そんなの、作品を大ヒットさせればいいだけのことでしょう」

ウォルト「それができたら話が早いんですよ」

ホーン「できますよ」

ウォルト「え?」

ホーン『白雪姫』はヒットします。私は、そう思いますね』

ウォルト「なぜそういう言い切れるのですか」

ホーン「それはあなただからですよ、ウォルト。あなたは、ミッキー・マウスを生み出し、全米にミッキーブームを巻き起こした。それだけじゃない。あなたはアニメーション映画にセリフを吹き込んで、色をつけて、あのアカデミー賞にも輝いている。そんなに実績と信用がおかれているウォルト・ディズニーが、次は何を手がけてくれるのか。世間の人々が無関心でいられるわけないじやないですか」

ウォルト「さあ、それはどうでしようか」

ホーン「ウォルト」

ウォルト「僕のわがままのせいで、社員を路頭に迷わせてしまふかもしれないんですよ、たかが童話アニメーションのために。果たして本当に、お金を払つて観に来てくれるかどうか」

ホーン「それは企画段階から心配してたことでしょう」

ウォルト「それはそうですが……」

ホーン「でも、あなた自身がいけると判断したから今があるのでしよう?」

ウォルト「わかってるんです!」

ホーン「ウォルト……」

ウォルト「もう、あんまりだ! 世間ってのはホンツトに冷たい。ちよつと前までは期待の星として持ち上げてたくせに、少し時が経てばすぐに叩く。一体、どんな神経をしてるんだ。傷ついている人間の身にもなつてくれよ!」

ホーン「そうですよね……」

ウォルト「ハル・ホーン、教えてほしい。あなたはいつも、ウチの作品を心から認めしてくれて、今まで応援や支援をしてきててくれた。あなたがいなかつたら、このディズニースタジオは成り立たなかつた。ですがハル・ホーン、僕たちは今、危機的状

況なんです。下手したら僕の道楽のせいで、本当にみんなを不幸にしてしまうかもしれない。僕が抱いた夢のせいでの、みんなをもつと苦しい目に遭わせちゃうかもしないんです。ハル・ホーン、どうか教えてほしい。僕は一体どうすればいい。みんなを救い出すには、一体何をすればいいんですか

ホーン「何もすることはありますよ、ウォルト」

ウォルト「えっ？」

ホーン「心配することはありません。世間の評判なんて、ただのキャンプファイヤーと一緒にです。今こそ燃え続けていますが、すぐにほとぼりが冷めます。大切なのは、あなた自身なのですよ、ウォルト。あなたは、アニメーションで世界を救いたかつたんじやないんですか？ この世界恐慌で苦しんでいる大衆に、彩り豊かなディズニー映画の力で、夢と希望を与えたかったのではないんですか？」

ウォルト「それは……」

ホーン「違いますか？」

ウォルト「……与えたいよ！ 僕は全米、いや、世界中のみんなに感動を与えるたい。

そして、僕は……世界の希望の光となりたい！」

ホーン「だつたらウォルト、その強い想いを決して忘れてはいけません。あなたの夢は、大衆の希望なのです。あなたは決して、一人ではない。見て下さいよ、ウォルト。こんなにも恵まれた才能にあふれてるスタジオが、一体どこにあるというのです。ここしかないでしよう？ ミッキーマウスの誕生から、やつとここまでたどり着いたのに、誹謗中傷？ そんなのに負けてどうするんですか。ウォルト、つらいのはわかります。この先どうなるのかが不安でたまらないのは、痛いほどわかります。ですがウォルト、希望を持ち続けるのです。どうかあなたの夢を、決して、捨てないでください！」

間。
ウォルト、ホーンを強く抱きしめる。

ウォルト「ありがとうございます、ハル・ホーン。あなたのおつしやる通りだ。アニメーション映画の第一線を進んでいる人間が、弱音を吐いていてはいけませんよね。ダメだダメだ。ウォルト、しつかりするんだ！ 僕にはディズニースタジオを引っ張る義務があるんだ。そして、大衆に夢を与える使命があるんだ！ 捨てちゃいけない。夢を捨てちゃいけないんだあ！」

ホーン「そうです、その意気ですよウォルト！ たとえ150万ドル、いや300万ドルの借金を抱えたとしても、これから先の未来に少しづつ返していけばいい！ 夢を見失わないで、共に前へ進みましょう。日の出のない夜なんて、この世には存在しないのです！」

暗転。

ウォルト、登場。

ウォルト「ロイ兄さん、大丈夫?」

ロイ「ああ、ウォルトか」

ウォルト「どうかしたの?」

ロイ「いや、なんでもない」

ウォルト「どうも、そういうふうには見えないけど」

ロイ「お前は作品のことに集中すればいい」

ウォルト「ダメだよ」

ロイ「ウォルト」

ウォルト「作品はもう、完成間近なんだよ。もう製作でやるべきことはほぼ終わって

るんだ」

ロイ「それはそうだけど……」

ウォルト「兄さん、『白雪姫』はあと少しで封切りなんだよ？」

「どうしたの。何か悩んでるんだつたら、社長の僕に話してみてよ」

ロイ「へッ。こんな時に社長面か？」

ウォルト「いいじやないか。悪い？」

ロイ「いいや」

ウォルト「何があつたの？」

ロイ「……いいか。落ち着いて、話を聞いてくれよ」

ウォルト「うん。どうしたの？」

ロイ「今日、映画配給会社から、契約解除を要求された」

ウォルト「えっ！？」

ロイ「配給会社ユナイテッド・アーティスツ社と交わしてた契約が、破棄されたんだ」

ウォルト「そんな！　どうして」

ロイ「実を言うと、原因はお前にあるんだよ、ウォルト」

ウォルト「え？」

ロイ「お前が『白雪姫』のテレビ放映を許可しなかつたから、ユナイテッド・アーティスツ社から契約解除を要求してきたんだよ」

ウォルト「そんな理由で？」

ロイ「ああ。おかげで今までの努力が水の泡だ」

ウォルト「そんな」

ロイ「これからどうする、ウォルト」

ウォルト「……ウソでしょ？　ついこの前まで、配給会社の宣伝マネージャーと、ハル・ホーンと話をしてたばかりじゃないか。ハル・ホーンはたしかに言つた。『大切なのは僕自身の心なんだ』つて。それなのに何だよ！　今は破局状態つてこと？」

冗談じやない！」

ロイ「どうする。テレビ放映を許そうか」

ウォルト「いや、それはダメだよ」

ロイ「どうして」

ウォルト「わからないのかい？　ウチが破産するからだよ」

ロイ「ウォルト、今はそんなこと言つてる場合じやないだろ」

ウォルト「いや、それだけは譲れない」

ロイ「ウォルト」

ウォルト「ロイ兄さんは、テレビなんて見たことないでしょ？」

ロイ「まあ、そりやあ」

ウォルト「あんな訳のわからないメディアなんかに、買いたたかれてもいいっていうの？」

ロイ「いや、でもなウォルト」

ウォルト「テレビなんていう得体のしれない機械のために、僕の大事なアニメーターたちの苦労を泡にする気はない。兄さんにはできるの？」

ロイ「それは……」

ウォルト「できないでしょ？　できっこない。少なくとも僕にはできない。テレビなんかに安く買ったたかれるくらいなら、他所の配給会社に乗り換えた方が断然いい」

ロイ「バカ野郎！」　ウォルト、相手はユナイテッド・アーティスツ社だぞ。今まで俺たちを支え続けてきたのは誰だ。俺たちの映画をどこよりも早く評価してくれてたのは誰だ。あのミッキー・マウスや『三匹の子豚』を最初に放映させてくれたのは、どこの会社だった！　俺たちの心の支えとなってくれたのは他でもない。ユナイテ

ッド・アーティスツ社だろ。ウォルト、今まで受けてきた恩を仇にする気か」

ウォルト「僕たちは遊びでやつてるんじゃない、ビジネスをしてるんだ！」　僕は今まで、さんざんクリエイターたちの血と汗、そして涙を目の当たりにしてきた。『白雪姫』という傑作を築くために、どれだけ皆が苦労してきたか。血眼になつて動物を觀察し続けて、脚本とも何度も向かい合つて、書き直させて。キャラクターの方針もコロコロ変え続けた。必死で耐え続けてきたんだよ、彼らは。それなのに、そんな血と涙の結晶を、テレビなんかに引き渡すのかい？　僕はできない。断じてできない

ロイ「ウォルト」

ウォルト「そもそもさ、お金って人を支えるためにあるんじゃないの？」

ロイ「は？」

ウォルト「お金をまともに払わずに自分だけ得をしようだなんて、どうかしてるよ。世界恐慌が起きたそもそもその発端は、みんなお互いに、自分のことしか考えなくなつたからなんじやないの？」　売り手は金欲しさに、漠然とモノをつくつて売りつけ、消費者は自分の欲だけのために消費をして。そもそもお金って、そんなことのために生まれたわけじゃないでしょ。何でわからないのかなあ。もっと柔軟になろうよ。僕たちは、命を懸けてきたんだよ？」　それなのに向こうは……」

ロイ「ウォルト……」

ウォルト「もつと考へてくれよ！　僕たちのことを、みんなのことを！　考へてくれよ！！」

ロイ「……」

しばしの沈黙。

ロイ「……悪かった。悪かったよ、ウォルト。お前の気持ちは、よくわかつた。そうだよな。俺たちはアニメーション制作会社の、トップだもん。もつと、強氣でいないといけないよな」

ウォルト「……」

間。

ロイ「契約を、解除しようか」

ウォルト「うん。そうしよう」

ロイ「わかった」

ウォルト「悪いね、ロイ兄さん」

ロイ「いや、いいんだ。俺の仕事は、愛する弟を支えることだ。ビジネス面は俺に任せろ。気にすることはないさ」

ウォルト「ありがとう」

ロイ「イヤ。それにしても、お前もいい社長になつたもんだ。感服したよ」

ウォルト「いや、兄さんほどじゃないよ」

ロイ「いいや。お前は立派な社長だ。俺が保証する。お前はこの映画制作会社で、一番しつかりしている社長だ！ 俺も、そんな社長のもとで働けて、本当に誇らしく

思うよ」

ウォルト「……ありがとう！」

ロイ「それじやあ。早速、ユナイテッド・アーティスツ社に行つてくるよ」

ウォルト「頼むよ、ロイ兄さん」

ロイ「ああ。任せといてくれ」

ロイ、退場。

ウォルト、窓の方を見つめる。

ウォルト「兄さんばかりに頼つてられない。あと少しなんだ！」

ウォルト、受話器を持って電話をかける。

ウォルト「ああ、もしもし。私ウォルト・ディズニースタジオの、ウォルトと申します。おたくの社長さんへ電話をつなげていただけませんか？」

電話を切られる。

だが、ウォルトは屈せずに、再び電話をかける。

ウォルト「ああ、もしもし。私ウォルト・ディズニースタジオの、ウォルトと申します。今お時間は空いてますか？」

また通話を切られる。

音楽。

ウォルト、悲しみのあまり発狂し、号泣してしまう。

間。

ウォルトはあきらめずに電話を続ける。

ウォルト「……ああ、もしもし。私ウォルト・ディズニースタジオのウォルトと申

します。おたくの社長さんの電話とつなげてくださいませんか。はい！ありがとうございます！ああ、社長さんですか？初めまして！いえ、少し相談したいことがございました。はい。今度直接お会いしたいのですが、空いてる日はござりますか？……そうですか、ありがとうございます！では、また現地でお会いしましよう。よろしくお願ひします。はい、失礼します」

受話器を置くウォルト。

ウォルト「必ず放映させる。みんなでつくった『白雪姫』で、みんなを、暗闇から救い出すんだ！」

暗転。

6

舞台は映画館の客席。

ウォルトとロイの声が聞こえてくる。

ウォルトの声「あ、緊張するうう」

ロイの声「今さら何なんだよ、ウォルト」

ウォルトの声「ごめん、もう少しだけトイレにこもらせて」

ロイの声「バカ野郎。もう散々こもつただろ？」

ウォルトの声「だつて不安なんだもん」

ロイの声「今さら何が不安なんだ。今日は映画の試写会なんだぞ」

ウォルトの声「わかつてるよ。でもさ」

ロイの声「でもなんだよ」

ウォルトの声「お客様がいなかつたらどうしよう」

ロイの声「いるよ。試写会の前売り券は完売しただろ？」

ウォルトの声「それはそうだけど。これからもヒットし続けるかどうか……」

ロイの声「それはこの試写会での反応次第だ」

ロイ登場。

ロイ「ほら。早くしろよ、ウォルト席は向こうだ」

ウォルト、ゆっくりと登場。

ロイ「どうした、ウォルト」

ウォルト「……ついに、やつたんだね。兄さん」

ロイ「ああ、そうさ」

ウォルト「いよいよ、この時がやつてきたんだね」

ロイ「ああ、そうだ。やつと上映できるんだ。世界初の、最初にして最高の、長編ア

ニメーションが」

ウォルト「企画からおよそ4年間。みんなで築き上げた名シーンの数々を、やつと、

ここで見せられるんだね！」

ロイ「大変だつたな。まわりにはさんざん誹謗中傷を言われて、借金もたくさん抱えてさ。もう心が折れそうになつたことが何度あつたことか。でも見るよ。こんな光景、生まれて初めてじやないか？」

ウォルト「そうだね！」

ロイ「漫画映画の地位も、上がつたものだな」

ウォルト「ほんとだよ。あの時僕を蔑んだヤツらに見せてやりたいよ。こんなにワクワクした顔の、たくさんのお客さんを！」

ロイ「そうだな」

ロイ、表情を一変させる。

ロイ「おい、見ろよウォルト。すごいお客様が来てるぞ」

ウォルト「見てのとおりだよ。もう、たくさん！」

ロイ「そうじやない。あそこを見ろ！」

ウォルト「えつ？ ……これは、夢じやないよね？」

ロイ「ああ。夢じやない」

ウォルト「でも、こんな夢みたいなこと、生まれて初めてだ。ハリウッドの名優たちじやないか！ まさか、僕たちのために来てくれたの？」

ロイ「それ以外に何があるんだよ」

ウォルト「ひやあ！ 信じられない、映画俳優たちが、僕たちの映画を観に来てくれてるなんて！ 見てくれよ、ロイ兄さん。あそこにいるのはマレー・ディート

リッヒだよね？」

あつちはジュディー・ガーランド、クラーク・ゲーブルもいるじゃないか」

ロイ「ああ。そしてあそこに座っているのは誰か、お前も知つてゐるよな？ ハリウッド映画界の名優中の名優。顔を見れば一発でわかる」

ウォルト「……喜劇王、チャールズ・チャップリン！」

うそだ、本物だ！」

ロイ「ああ、間違いない！ あのひょうひょうとした顔つきに黒いちよび髭！」

間違

いない」

ウォルト「一度話をしてみたかったんだ。兄さん、一緒に挨拶しに行こう！」

ロイ「ああ、そのつもりさ」

ウォルト「早く挨拶に行こうよ、ロイ兄さん！」

ロイ「まあ待て」

ウォルト「どうしたの、兄さん」

ロイ「彼らとの挨拶の前に、一つ言わせてくれ」

ウォルト「何なのさ」

ロイ「夢が叶つて、本当に、おめでとう！」

ウォルト「…………ありがとう。ありがとう！」

ロイとウォルト、互いに手を握り合い、強く抱きしめ合う。

ロイ「辛かつたな、ウォルト。本当に、つらかつたな」

ウォルト「うん……でも、今はそれ以上に、幸せだ！」

暗転。

7

舞台は社長室。

ウォルトとロイは、それぞれの席に座っている。

ウォルト「はあ。終わっちゃった」

ロイ「ああ、終わったな。ハッピーエンドだ」

ウォルト「そうだね。『白雪姫』は世紀の大ヒット作になつて、しかも、またアカデミー賞に輝いた。チャールズ・チャップリンとも直接話ができたし」

ロイ「そうだな。ヒットしたおかげでウチの会社も大黒字だ。大借金王から、大富豪への大変身なんて、まるで野球の逆転ホームランだ。人生どうなるかわからないも

んだな」

ウォルト「ああ、そうだね。もう、最高だ！」

ウォルト、デスクから書類を取り出す。

ウォルト「これで、次の企画も実行できるよ」

ロイ「えつ？ 次の企画だつて？」

ウォルト「そう！」

ロイ「お前、まだ何か考えてたのか？」

ウォルト「もちろんだよ」

ロイ「ちよつと待つてくれよ……」

ウォルト「ロイ兄さん、ここをどこだと思つてるんだい？ アニメーション制作会社だよ？」

ロイ「いや、それはわかってるけど」

ウォルト「次の企画を早めに決めておかなくちゃ、アニメーターたちに申し訳がない。だから僕、あらかじめいくつか、企画を固めていたんだよ」

ロイ「いくつかって、たとえば」

ウォルト「これさ。次の企画は、『ピノキオの大冒険』だ！」

ロイ「はあ？」

ウォルト「次の企画は『ピノキオ』だよ。ピ・ノ・キ・オ！」

ロイ「おい、勘弁してくれよ……」

ウォルト「僕の頭の中では、もうラストシーンの構想までしつかりと固まつてるんだ。鯨の襲撃から逃れようとするピノキオとゼペツトおじさんが、崖の中に間一髪で入つてさ」

ロイ「費用はどれぐらいかかるんだよ」

ウォルト「え？」

ロイ「費用はどれぐらいかかるんだ？」

ウォルト「いや……まだそこまで計算はできていけど、今回の『白雪姫』を超える

るクオリティーぐらいは欲しいから……」

ロイ「はあ！？」

ウォルト「ダメかな」

ロイ「いや、ダメというか……」

ウォルト「ダメなの？」

ロイ「……お前なあ。その資金をかき集めるのに、今度はどれだけ走り回らなくち

やいけないんだよ」

ウォルト「ごめん」

ロイ「ほんとだよ。さんざん人をこき使つておいて」

ウォルト「そうだよね。ごめん……」

ロイ「少しは休暇を取らせろ」

ウォルト「えつ？」

ロイ『白雪姫』のために、俺がどれだけ他所に頭下げてきたか知つてるだろ？ 俺もいいかげん、休暇がほしいんだよ。頼むよ、ウォルト。兄さんを見殺しにしないでくれ

ウォルト「ああ、そういうこと？」

ロイ「そうだよ、当たり前だろ？ が」

ウォルト「ごめん。もちろん、兄さんの休暇は有給で取れるようにしておくよ」

ロイ「ありがとな」

ウォルト「うん。それで、次回作の資金についてのことなんだけど……」

ロイ「もう、わかつてるよ。また俺に資金集めをしてもらいたいんだろ？」

ウォルト「そう。ダメかな」

ロイ「いいに決まってるだろ。大丈夫。お前のためだったら、どこにでも行くよ」

ウォルト「ごめん……」

ロイ「何で謝るんだよ」

ウォルト「だつて、僕はいつも、兄さんたちを振り回してきたから」

ロイ「ウォルト」

ウォルト「もつと、民主的に会社の経営をしなくちゃいけないことは、わかつてるんだ。でも、どうも僕、自分がつくりたい映画の構想ばかりが先走っちゃって。そのせいで、みんなを奴隸のようにあちこち振り回しちゃってさ。もう、ホントに、ごめん！」

ウォルト、深々と頭を下げる。
しばしの沈黙。

ロイ「いいよ。ここは、お前の会社だ、ウォルト。ウォルト・ディズニースタジオなんだ。もつと堂々としてろよ」

ウォルト「ロイ兄さん……」

ロイ「社員である俺たちに夢を与えることが、ウォルト・ディズニーの仕事だろ？」

ウォルト「兄さん」

ロイ「お前は、いつまでもお前らしくいろよ。人目を気にせず、金にも世間にもとらわれるな。自分のやりたいことに、どんどんつき進めよ！」

ウォルト「……ありがとう、ロイ兄さん！ 僕、これからもがんばるよ！」

間。

ロイ「で、次の作品は、具体的にどんな企画なんだ？ 金はどれぐらいかけるつもりなんだ？」

ウォルト「ロイ兄さんはお金ばかり」

ロイ「何事も、金がないとやつていけないだろ？」

ウォルト「それはそうだね」

互いに笑い合う、ウォルトとロイ。

音楽。

ロイ「さ、今のうちにさらけ出しちまおうぜ」

ウォルト「えっ？」

ロイ「教えてくれよ。どうせお前のことだ。ここから先も、何か考へてるんだろ？」

ウォルト「えつ、いや、それは……」

ウォルト「教えてくれよ。お前の次の目標を、そして、ウォルト・デイズニーの夢を！」

ウォルト「……いいの？」

ロイ「もちろんさ。ウォルト、素直に話してくれ。お前が次に叶えたい夢は、何なん

だ？」

ウォルト「僕の叶えたい夢……それは……！」

ストップモーション。

しばしの間の後、やがて照明がだんだん落ちていく。

おわり

参考文献

- 『ウォルト・ディズニー すべては夢みることから始まる』 PHP研究所・編 PHP
P文庫 2013年
『ウォルト・ディズニー――創造と冒險の生涯』 ボブ・トマス・著 玉置悦子、能登路雅子・訳 講談社 1983年